

## 社会関係における

### 日本的なるものについて

堤 史 朗

(一)

今日にいたるもなお、西欧||合理、日本||非合理の図式を基として日本社会に対する分析がしばしばなされているが、このような日本社会の把握の仕方ですべての現実の日本社会に生起する種々様々な現象程度を分析し得るのであろうか。この疑点が常に私の抱かざるを得ない問である。

では、何故、今日まで西欧||合理、日本||非合理というとらえ方が暗黙の前提として容認せられて、日本社会が把握され続け来たのであろうか。その発生の源を探ってみるに、明治維新以後における明治新政府の産業立国政策のなかで、後発資本主義国として出発せざるを得なかった日本が近代化のモデルを西欧に求め、いわゆる西歐化即近代化であるとの認識に立ち、且つ、強力に西歐化を進めて行った、その延長線上にあるとらえ方こそが西歐||合理、日本||非合理の図式であると言えよう。

ところで、今日、日本社会の現実を照らしてみた場合、いわゆる日本が後発資本主義国としてその近代化の歩

みを踏みださざるを得なかったにしても、西欧化≠近代化ではないのではないか。この反省は今日に至るまで、さまざまな場面で言及されてきたが、その口火を切ったのは、つとに外国人研究者の手になる日本社会の実証的研究を踏まえての発言であった<sup>①</sup>。つまり、これら外国人研究者の手になる日本社会に対する見解は、近代化のパターンに、欧米型であるとか、ソ連を始めとする社会主義国化型であるとかのほかは、第三のパターンとも言える日本の近代化のパターン、すなわち、日本は日本なりの近代化のプロセスが認められるというものである。換言するならば、それぞれの国のなかに存する文化の特質に規定されるものとして近代化のプロセスを考へるべきではないか、との問いがこれら外国人研究者による日本研究よりもたらされた成果であり、必ずしも西欧化即近代化たり得なかつたのだ、とのその後における反省に立ち今一度日本の近代化の歩みを考え直してみんとする機会の提供となり、今日、それぞれ専門分野を異にする研究者相互の協同研究による日本の近代化論の研究を生み出している<sup>②</sup>。その上この過程は、今日みられる柳田民俗学の再評価、文化人類学的視点の種々様々な場面への援用ともなり、また、極めてジャーナリティクにとらえられている嫌いがないではない最近の日本論、日本人論にもつながっていると考えられる。

そこで、こうした今日における、日本の近代化論再検討との係り合いにおいて、私自身、「社会的、文化的背景の異なる欧米社会において構築された諸理論は、たとえそのまま日本社会に移入し得たとしても十全には機能し得ないのではないか、むしろ、日本の社会学者の手になる日本社会の現実に深くコミットした形での実証的研究が積み重さねられ、その上に理論化構築の努力がなされる必要がある」との社会学的立場に立脚して、人間関係論及組織論の比較分析<sup>ⅴ</sup>を志す限り、本稿においては、それへの一過程―組織文化論への途を探る意味合いにおいて、『社会関係における日本的なるもの』を考えてみた次第である。

つまり、欧米社会の社会関係及人間関係を律するものと、日本社会のそれとは自ずから性質を異にしているの

ではないか、との仮説より、左記のような二組の対概念を設定することによって、日本社会乃至日本社会の社会関係及人間関係は必ずしも従前から言われてきた如く非合理主義的であるのみならず、合理主義的側面をも谷わせ持っていたのではないだろうか、との問を考えてみようとするものである。

欧米社会

日本社会

合理主義 ——— 心情主義  
個人主義 ——— 集団主義

ただ、本稿においては、これら二組の対概念の四要素のうち、合理主義、個人主義、集団主義については幾つかの優れた諸見解があり、<sup>③</sup>加えて、私の問題関心の中心が心情主義に存することゆえ、心情主義に論点を限定して考えてみることにする。

(二)

日本社会の社会関係及人間関係を律するものとしての心情主義は、故和辻哲郎博士が日本社会の社会関係及人間関係の象徴としてとらえた日本の家屋の「襖(唐紙)」の果す機能についての論述より説明することが出来る。<sup>④</sup>和辻博士は、欧米社会の家屋が精巧なる錠前によって締めまりをする個々独立の部屋に区切られているのと同じ日本の家屋は、「『距てなき結合』を表現」しておき、「どの部屋も距ての意志の表現としての錠前や締めまりによって他から区別せられることがない。すなわち個々の部屋の区別は消滅している」のであって、「たとえ襖や

障子で仕切られているとしても、それはただ相互の信頼において仕切られるのみであって、それをあけることを拒む意志は現わされておらぬ。だから距てなき結合そのものが襖障子による仕切りを可能にするのである」と、和辻博士は言う。ことは、さらに、部屋の中に人が居て、襖が閉っている場合には、「入るな」とか「入るときは合図せよ」という意志が現わされているのである。

また、襖や障子を距てての話し声は、聞こえても「聞いてはならない」という意味であり、つまり、聞かせない、聞かない、という相互理解が成立していることを表わすのであって、しかも、この相互理解は、単なる約束ごととしてあるのではなく、思いやり（思いやり）と察し（察し）があつて、人々がそれぞれ相手の人の身になって考えることにより初めて成立するもので、それが襖や障子や衛立ではなく、注連縄であつても同じことで、その思いやりと察しによる相互理解は成立するのである。

つまり心情主義とは、社会関係及人間関係の中心をなすのが心情（心なさけ）とその心情との作用による共感にあると考へる思想であつて、「こころ」とその「こころ」に對する人思いやりと察しによる相互理解—共感作用—Vの思想が心情主義と言へるもので、言うならば、知と情との統合による共感作用こそが心情主義の旨とすべきところである。もとより、広く流布している理性に對しての「感情」（この言葉は「非合理」という言葉に近い響きを持つている）とは全く別のものであり、理性や感情などの欧米的概念では説明し得ないものであり、あえて言うならば、理性と感情が分離することなく一体であるところの「一種の人倫、心のあり方を意味する」のが心情主義である、とも言えよう。

以上、欧米社会の社会関係及人間関係を律するものとしての合理主義に對して、日本社会の社会関係及人間関係を律するものとしての心情主義を考へてみた訳だが、上述した如く、心情主義は非合理主義とは全く別のものであり、合理—非合理と區別する考へ方とは根本的に性質を異にする思想であることを再度断つておく必要がある。

る。

また、このように袂や注連縄で共感が成立する日本社会の社会関係及人間関係においては、互いに鋭い直感力のみが要求せられるところとなり、表現力はそれほど必要とされず、つとに腹芸が尊ばれ、明確なる表現力を養う必要がないという結果を生むことにもなり、宴会や飲み屋での共感作用は極めて日本社会の人間関係ならでは⑤のものであって、到底、国際社会では通用するものではないのである。

### (三)

それでは、このような心情主義の発生的基盤は何に求められるであろうか。この点に関しては、今日、民俗学、文化人類学、等々において、日本人の国民性及日本文化の特質という形において論じられているが、その先端を切ったのは、和辻博士である。博士は、「歴史性のみが社会的存在の構造なのではない。風土性もまた社会的存在の構造であり、そうして歴史性と離すことのできないものである。歴史性と風土性との合一においていわば歴史は肉体を獲得する」との立場に立って、人間存在の風土的規定の三つの型を設定する。その一つの型は、「砂漠型」であり、ここでの特色は「乾燥の生活」を余儀無くされ、人々は自然の脅威と戦いながら、草地や泉を求めて歩かねばならず、かくて草地や泉を得ようとして人間は他の人間と対立し合うのである。かくして砂漠の人間の構造は対抗的戦闘的である。

次の型は、「牧場型」であり、これはヨーロッパに広がる緑の草原地帯を指すもので、湿潤と乾燥との総合として規定されるのであり、自然が従順であることは、自然が合理的であることを示し、このことが人間をして自然の中に規則を探索せしめたのであって、ヨーロッパの自然科学がまさしく牧場的風土の産物であり、加えてヨーロッパ人のもつ合理主義や個利主義をも容易に理解されるのである。

第三の型は、「モンズーン型」であり、日本もこれに入る。モンズーンとは季節風のことだが、とくに夏の季

節風は熱帯の大洋から陸に吹く風であつて、したがつてモンスーン域の風土は暑熱と結びついた湿気との結合を特性としており、しばしば、暴風、洪水、大雨として人間を脅やすこととなり、これは、人間に対抗を断念させるほどに巨大な力であり、人間はただ受容的、忍従的となるだけなのである。さらに、この暑熱と湿気との結合は雑草としての夏草を大いに繁茂せしめ、このために日本の農業労働はヨーロッパのそれとは大いに異なり、日本の農業労働の中心にくるのは草取り、つまり雑草の駆除である。しかもそれを暑熱の頃にくり返しておこなわなければならない、したがつて極めて苦しい「自然との戦い」が、日本の農業の特色となつており、このような日本における農業労働の特殊性は、働きづくめに働くことを尊重する日本独自の勤労観を生むなど、日本人の国民性の上に大きな影響を与えることになつたのであり、「日本の人間の特殊な存在の仕方は、豊かに流露する感情が変化においてひそかに持久しつゝその持久的変化の各瞬間に突然性を含むこと、及びこの活発なる感情が反抗においてあきらめに沈み、突発的な昂揚の裏に俄然たるあきらめの静かさを蔵すること、において規定される。それはしめやかな激情、戦闘的な恬淡である。これが日本の国民的性格にはかならない」<sup>⑥</sup>。

以上和辻博士の分析に影響を受けて、特に戦後において、故石田英一郎教授を始めとする文化人類学者、西洋史学者、等々<sup>⑦</sup>において西欧社会との比較研究によつて日本人の国民性及び日本文化の特質などについての研究がなされてきたが、それらの所説を総括・要約してみると大体次のようになる。これらは、心情主義の発生的基盤でもある。

(一) 欧米社会とは異なる日本社会の「風土」的条件と、欧米社会の有畜粗放農業とは違つた日本社会の農業労働の特殊性——日本列島が「モンスーン」地帯に属していることは和辻博士の引用をもつて上述したが、モンスーン地帯において稲が普及した理由としては、(1)他の種類の作物では利用し得なかつた低湿地の広範なる利用を可能にしたこと、(2)その収獲高が麦、粟に比して極めて高いこと、(3)稲は比較的短期間のうちに収獲が見込まれ、同一耕地での年二回の収獲が可能だつたこと、(4)稲の変種が夥しいことより、環境に順応しやすく、播種の時機

を変えたり、植え付けの場所を変更できること、(5) 稲の収穫高が高いので所与の耕作面積上に多数の人々を養い得る作物であること、などが指摘できる。

とくに、(5)は重大な特徴であつて、「これがあるがために、純粹に田園的、農業的な国土において、ヨーロッパその他における近代的な工業地帯にみると同程度の稠密な人口密度の成立していることが稀ではないのである。そして、インドを含めて、モンスーンのアジアと呼ばれる地域は、実に全人類の半数以上を養っている。……周知のように、稲の栽培には豊富な労働力、忍耐強く細心の労働力が要求される。耕耘に男性の努力の総てを要するとすれば、同じく重要な、かつ手数を要する作業、田植、除草、刈入れ、脱穀などには家族の女性や少女たちの労働力が無駄なく活用される。この意味では、水田の国は多産な社会と照応するものだといえる」<sup>(8)</sup>。つまり、米作には、極めて弱い稲（日本の場合は、水稻）を世話し、育てるといふ親身な心情が必要で、労苦が爽りの秋を迎えると共に、農民と稲との間には共感が成立するのであり、加えて、数少ない家畜をも家の中で飼うことにおいて生活を共にするのである。さらに、田植えや収穫時期には、村の人々との間に相互扶助が必要であり、ここにおいても「思いやり」を必要とするのである<sup>(9)</sup>。

(二) 日本列島の自然的環境の多様性——モンスーン地域に入る日本人の特殊な存在の仕方——受容的・忍従的である点については上述したが、このことは、農民をして自然の克服を断念しからむるとあるとあるを自然との融合、調和を尊ぶ生活態度の形成が増長せられ、必然的に、もっぱら「イネの豊饒をもとめる農耕儀礼が民族宗教の内容を形成」するところとなり、個々の家族のみならず、村全体が共同体的紐帯を強め、自分と他人との区別が曖昧で、村全体が「思いやり」、互いに「合うこと」となり、ここにも共感の成立が認められるのである。

以上二点が、心情主義の発生的基盤として指摘できる点であつてみれば、通り一遍に、「非合理主義的である」として片付けられないものを包含し得ているのではないだろうか。

四

次に、心情主義が現実的・具体的に、社会関係及人間関係で持っている特徴として、社会関係及人間関係が論理的・納得的な関係ではない、ことを指摘しておく必要がある。つまり、日本社会の社会関係及人間関係は、 $\wedge$  思いやり $\vee$ と $\wedge$ 察し $\vee$ による共感が成立してこそ円滑に機能するのであって、論理的・納得的であることが社会関係及人間関係の基礎である欧米社会の合理主義とは性質を異にするのは明らかであり、自他の区別が明確でない心情主義に基づく日本社会において、民主主義が自由主義が極めて日本的なる解釈を施さずとも所以なきことではない。

また、心情主義は社会関係及人間関係において論理ぬきで「和」を尊び、混乱を回避しようとする特徴を持っている。このことは、自己の論理を引込めることは、自分の死をも意味するかもしれぬ欧米社会の社会関係及人間関係を持つ自我の不安は心情主義には存在せず、むしろ、世間体を意識して行動することこそ心情主義的な社会関係及人間関係の特徴なのである。

さらにまた、本来的には、契約的關係にある主従関係も、日本社会においては心情主義を基盤として「恩」と「義理」で成立っている。

「人の行なうべき人倫」とされる「恩と義理」に対しては戦前より幾多の研究者による所説が述べられているが、これらの諸説はそれぞれ区で、一義的には規定しえず、ただ、「恩と義理」とが封建社会と不可分の生活規範なり道徳として存したということではなくて、むしろ封建社会の成立以前より日本人の社会関係及人間関係を規制する生活規範ないし道徳として存在し、「それは(義理のこと―引用者注)日本人としての共通性を知るための重要な風習と見る」べきであって、川島武宜教授によれば、「諸の義理の範疇は、義理が特定の他人との間に一定の『協同体』的な関係を維持し強化するに必要な行為の履行を要求している」のであって、その「協同体」的な関係の条件として、(1)継続性、(2)生活関係の包括性、(3)個人の私的支配領域の弱いこと、もしくは欠け



ていること、(4)「人的な」(Personal, Persönlichkeit)結合関係、(5)情緒的な(emotional)な結合であること、(6)身分階層社会に見ている、ことなどが指摘されるのである。

では、この「恩と義理」は、どのようにして日本社会に現実的、具体的に根を下したのであろうか。江戸時代の中頃において、儒教の原理に即しての心情主義の倫理化がおこなわれ、心情主義は、公的心情としての義理(人倫)と、私的心情としての人情とに分離するところとなり、「家長は家を代表する役割をもったので、彼の個人的行為も制限された。そしてすべての家族は彼等の私(人情)を家の公(義理)のために捧げることが最高の道徳とした。しかし家長は家を代表する意味で家長に対する家族の關係が家の秩序の根幹となつたから、家長に対する奉仕は家の公となり、家族自身のこととは私と考えられ、公に奉仕する義務を重要なものとする」ことによつて、私的心情としての人情を否定して、公的心情としての義理への献身を余儀無くされた。従は、主、のもつより大きな心情体系に包まれることが暗黙のうちに期待されているのであつてみれば、日本社会の主従關係が、欧米社会の主従關係と異なるのは至極当然のこととして了解されよう。

(四)

以上これまでにおいて、日本社会乃至日本社会の社会關係及人間關係は、果して合理主義的なのか、非合理主義的なのか、との問を基として二組の對概念を設定することにおいて心情主義について考えてみたわけであるがこの考え方は、パーソンズ(T. Parsons)の“Pattern variables”の理論に依拠している。

このパーソンズの「型の変数」の理論は、社会構造(social structure)を理解する手掛かりとするために、テンニエス(H. Tönnies)の二元図式—Gemeinschaft und Gesellschaft—を發展させる形で設定したもので、「型の変数は二分様式であり、状況の意味が行為者にとつて確定的となる前に、だ

から彼がその状況に関して行為しようる前に、そのどちらかの側を行為者が選ばねばならない。基本的な型の変数（すなわち行為理論の關係枠から直接出てくる型の変数）は五つしかなく、それらはそこから出てくる型の変数のすべてであるという意味で一つの体系を構成すると私たちは主張するのである（表参照）。

<(A)>

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| (1) Affective—neutrality | Affectivity              |
| (2) Self—orientation     | Collectivity—orientation |
| (3) Universalism         | Particularism            |
| (4) Achievement          | Ascription               |
| (5) Specificity          | Diffuseness              |

<(B)>

ところでこれら五つの「型の変数」の詳細は省くが、「型の変数」は、(1)行為の次元においては「選択」であると同時に、(2)パーソナリティの次元では「選択の習慣」として定着し、(3)集団の次元では役割期待として定着し、その社会の諸「制度」として具体化する。そして、(4)文化の次元では価値基準として「文化の型」を形成するところとなる。

そして、この最後の文化の次元においては全体社会の類型としての意味をもつにいたるのであるが、このパーソナルの「型の変数」を整理してみると図の如くで極めてすっきりした形での二分法が提示されるが、これをもって現実の日本社会の分析に際してどの程度の妥当性を持ち有るかに対しては多少の疑点が生じるのである。すなわち、パーソナルにおいては、(A)グループは合理主義的社会の諸指標であり、(B)グループは非合理主義的社会の諸指標として提示されているのであって、これを現実の社会關係及人間關係の分析に照らし

てみた場合、必ずしも二分法的に区別が出来ず、ある特定の社会関係なり、人間関係は(A)・(B)相互の要素を互いに含んでいる、と考えるべきで、この点をもって心情主義が、パーソナルズの「型の変数」のどこに位置付けられるのか、との模索を通じ日本社会の現実により深くコミットとした「組織論の比較分析」のための理論化への努力が今後に課せられた私の課題である。

「注」

- ① 外国人研究者の手になる著作は数多くあるが、その中で示唆多き日本の近代化、産業化に対しての論述として、次の三冊がある。

James C. Abegglen, 『The Japanese Factory』

Salomon B. Levine, 『Industrial Relation in Postwar Japan.』

Clark Kair ed, 『Industrialism and Industrial Man』

- ② 高橋幸八郎編「日本近代化の研究」(上・下)。

- ③ 合理主義、個人主義については、津田真澄「日本の労務管理」第一章に詳しい。

集団主義については、伊藤長正「集団主義の再発見」。間宏「日本の経営」を参照。

- ④ 和辻哲郎「風土—人間学的考察—」。

尚、会田雄次「現代親不孝論—人倫的關係の消滅」、  
「察することと話し合うこと」以上論文二篇より多  
大なる示唆を受けた。

- ⑤ 加藤秀俊「自己表現」。中根千枝「タテ社会の人間関係」。

- ⑥ 和辻、前掲書。

⑦ 文化人類学専攻の石田英一郎、増田義郎、西洋史専攻の会田雄次、鯖田豊之、ドイツ文学専攻の西尾幹二  
科学文化史専攻の筑波常治、農業経済学専攻の飯沼二郎、等々。さらには、イザヤ・ペンダサンの「日本人  
とキダヤ人」も和辻説の影響を受けたと考えられる。

⑧ 飯塚浩二「世界史における東洋社会」。

⑨ 鈴木栄太郎、有賀喜左衛門、等々「農村社会学」に関する著作、論文。

⑩ 村上重良「国家神道」。

⑪ 津田、前掲書。

⑫ 会田雄次「ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界」。

⑬ 津田左右吉、桜井庄太郎、姫岡勤、源了円、さらには、ルース・ベネディクト、等々。

⑭ 有賀喜左衛門著作集Ⅳ「封建遺制と近代化」。

⑮ 川島武宜「義理」。

⑯ 有賀、前掲書。

⑰ E. Parsons and, E. Shils Toward a General Theory of Action

F. Parsons and N.J. Smelser, Economy and Society

### △附記▽

本稿は、昭和四十七年一月二十九日(土)の明星大学人文学部社会学科の研究発表会における発表要旨であり、  
私の研究課題である『組織論の比較分析』に際しての、研究姿勢なり、前提とする考え方を提示したにすぎず  
「組織文化論」としては十分に意を尽くせず、この点に関しては後日を期したいと願う。

(昭和四十七年二月二十五日)